

これが豊旗雲だ

伊藤 亀 雄*



豊旗雲の一例，1981年11月8日。

1. 年賀状

友人の福田喜代志氏は毎年の賀状に必ずエトの絵を画いてくれる。今年は癸亥の年だから猪になるわけだが、十二支の中で恐らくこれが一番画き難いのではないかと。思う。なにしろ、それによく似た家畜もあることだから……。愈々元日、見ると果たして三匹の子供を連れた動物が画いてある。私は本物の猪を見たことはまだない。しかし、母子共大変威勢がいいから、これなら猪に相違ないと思って安心した。ところが、その背中に背負ってきた数行の便りが、私を落胆させた。

“昨年、豊明殿で豊旗雲というのを見ました。あれはどう見ても層積雲で、絹雲ではないです。宮内庁になんとか文句を申したいと思っています”。

どうも穏やかでない便りですが、福田氏は勲三等の勲章を戴くために宮中に参内して、あの有名な豊旗雲の綴れ織りを見られたのであろう。実はこの数年前に、藤村郁雄氏からも

“あの雲は層積雲か片積雲だから豊旗雲とはいえない”

という知らせがあった。だが、なぜ豊旗雲は層積雲や片積雲ではなく、絹雲でなければいけないのか、また、なぜそれをわざわざ私に知らせてくれたのか。

そのわけは、戦時中、私は観天望気法の研究をしていて、偶然豊旗雲の実体をつかむことができたので、それを「天気」15巻3号、17巻1号、22巻6号などに報告したことがあるからである。それは要するに、豊旗雲とは北東—南西に空を亘る雄大な帯状絹雲であって、壁画のような下層雲は豊旗雲ではない、というのである。これに関しては、根本順吉氏も次のように述べられた。

“(壁画の) 題名は豊旗雲ではなく、もっとほかの名前にかえるべきでしょう。それは瑞雲でも、慶雲でもよいと思います。漢語が気に入らぬなら、和名でもよいと思います”。

2. 動かぬ証拠

日本文徳天皇実録は六国史の一つで、その巻十にこんな記事がある。

◎天安二年(858年)六月十一日

早旦有白雲。自艮至坤。時人謂之旗雲。

◎同年八月十九日

是夜有雲竟天。自艮至坤。人謂之旗雲。

(注——艮は北東、坤は南西にあたる)

これは国文学者の間では以前から知られていた由であるが、雲の知識がないため、その重要な意味を理解することができなかったのである。もし気象観測者がこれを見たなら、ひと目で、これは帯状絹雲だと判ったであろう。なぜなら、下層雲がこのように空を亘る雄大な形を示すことはないからである。従って層積雲や片積雲は決して豊旗雲とは言えぬのである。なお、この旗雲が豊旗雲と同じものであることは一般に認められている。

更に文徳実録を探すと、いま一つ重要な記録を発見す

* Kameo Itoh.

ることができた。

◎天安元年十月十五日

是日、有白雲、広四尺許、東西竟天。

前の記録と違って、これは雲の向きが東一西になっている。そして、そこには「旗雲」の二字はない。なぜだろうか。それは当時の人が帯状絹雲には、性質の相反する二つの種類があることを知っていたからである。即ち、晴天の持続することを示す艮一坤の雲は旗雲だが、翌日雨天になる東一西又は巽一乾は旗雲とはいわぬのである。

3. 結 び

豊明殿には今後も年々多くの人が参内して、その壁画

を見るであろう。そして誤った雲の知識を得て退出することになるだろう。そのようなことを、このまま放って置いてよいものだろうか。私は思い切って「天気」22巻6号の論文を宮内庁長官に献じた。長官からは折り返し丁重な礼状をいただいた。だから、綴れ織りの題名は既に改められて、一件は落着いたものと思っていたのである。福田氏の年賀状を見て落胆したというのは、このようなわけがあるからである。

豊旗雲がどんな雲であるか、今までは誰にも判っていなかった。だから、こんなことになったのはやむを得ない。しかし、誤りが判った以上、一日も早くそれを改めることを期待するものである。

(392頁より続く)

候学論説(関口 武 編), 東京堂, 51-71.

野本眞一・千葉 長・矢島栄三, 1982: わが国における1月の気温および降水量の解析, 昭和56年度全国長期予報技術検討会資料, 気象研究所予報研究部, 6-21.

安田清美, 1978: 日本における降水量の変動係数について, 研究時報, 30, 199-206.

吉野正敏, 1978: 気候学, 大明堂, 15-66.

座間味忠, 1982: わが国の亜熱帯地方における気象とその予報, 気象特性, 気象庁技術報告, 102, 18-35.